

【 パ ッ ケ ー ジ ソ フ ト 】

レンタル市場 11月度レポート

◆————◆
< 2011年12月12日 >

「過去最低」と言われる
10月の不調が継続

KRI 

キネマ旬報映画総合研究所

レンタル市場
11月度レポート

【ランキングから／レンタルならではの。ジェイソン・ステイサムが大健闘】

10月度の貸出数で首位となったのは、11月2日リリースの『パイレーツ・オブ・カリビアン／生命(いのち)の泉』。興行収入は約90億円と、前作『パイレーツ・オブ・カリビアン／ワールドエンド』の109億円には及ばなかったものの高い人気を維持しているシリーズ最新作だ。リリース日が月初と、集計日数でも有利だったこともあり、2011年の興行成績トップと目される『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART2』をおさえた。一方の『ハリー・ポッター〜』は、11月16日リリースで、『パイレーツ〜』の約半分の集計期間にもかかわらず堂々の2位。興行成績は前作『PART1』の興収68億円を大きく上回る、約96億円。ハリー・ポッターシリーズの最終作ということで、息の長い回転が期待されている。また、『PART2』リリースに伴う店頭での関連作陳列による効果も手伝い、『PART1』が60位から20位にジャンプアップしたほか『不死鳥の騎士団』『謎のプリンス』などの過去作も一様に回転数を伸ばしている。3位は11月2日リリースの『メカニック』。公開規模は全国37スクリーンで、興収も数千万円という映画興行的には小ぶりの作品だが、レンタルでは超強力タイトルとなる。ジェイソン・ステイサムがこれほど圧倒的な人気を得るマーケットは、日本のレンタルマーケットくらいではなかろうか。まさしく、“ビデオ・スター”と呼ぶにふさわしい。因みに、単純な貸出数比較では、前月に本作がリリースされていたら首位の『X-MEN：ファースト・ジェネレーション』を凌いで首位に立っていたことになる。公開スクリーン数37の小品がトップになるというのだから、レンタルの特殊性がわかろうというものだ。4位は前月、6日間の集計で15位に食い込んだ『パラダイス・キス』。5位は前月2位だった『GANTZ PERFECT ANSWER』、6位には小栗旬と長澤まさみが競演した山岳もの『岳ーガク』と続く。以下、初登場の注目作は、内容評価が非常に高い『八日目の蟬』が9位、ダウントウンの松本人志監督第3作となる『さや侍』がベスト10に入った。18位の『ロシアン・ルーレット』も『メカニック』同様、ジェイソン・ステイサム主演の小品(33スクリーン)だが、こちらはサスペンス色が強かったため、レンタルユーザー好みのハードアクション作品である『メカニック』ほどの瞬発力は発揮できなかったようだ。また、11月は海外TVドラマの新シーズンがいくつかリリースされており、店舗によっては『FRINGE／フリンジ〈サード・シーズン〉』や『V〈セカンド・シーズン〉』などが上位に食い込んでいる。

【11月度市況／10月に続いて深刻なレンタル不況】

前月は「開店以来の低水準」「過去最悪」と言う声がそここで聞かれるほど“異常に”悪い市況だったが、11月も多少の回復基調は見られるものの、大きな流れは変わっていない。中には、「前月よりも悪い」という店舗や「前月は書籍部門が好調だったのでまだ良かったが、11月はそれも大きく落ちた」というチェーンもあり、レンタル不況の深刻さは続いているといえる。上場各社の発表を見ると、前月からの明確な回復が見られるのはシチエで、92.2%から100.4%にアップしている(既存店売上前年比／以下同)。ただし、前月の落ち込みに対してシチエは「前年同月に行ったキャンペーンが好調だったため」とコメントしており、“回復”という表現は当たらないのかもしれない。ゲオは11月のレンタル実績を発表していないが、「既存店売上」は98.0%。「ゲームソフト関連に動きが出たものの、ゲーム機器、その他物販が伸び悩み」としており、レンタルには言及していない。前月には「(レンタルの)主要タイトルが少なかったため」と前年割れを説

明しているだけに、コメントするほどのレンタルの好転はなかったと見てよいだろう。また、トップカルチャーは91.4%から1.5%アップの92.9%で着地し、三洋堂は前月と同じ94%。これらも好転しているとは言いがたい結果だ。因みにトップカルチャーは前月「通年では101.7%」と発表しており、この2ヵ月の結果がいかに悪いかがわかる。三洋堂も、4月から9月までの前年比推移は98%→100%→103%→101%→99%→103%となっており、10～11月の94%という数字は一段階低い。不調の原因は様々取り沙汰されているが、作品不足は衆目の一致したところだ。とはいえ、10月に突然作品が不足したわけではなく、数ヶ月間にわたって継続していた不足が積み重なり、店頭の商品力、とりわけ準新作を含めた新作周りの商品力が低下してたと考えられる。

ところで、JR各社の月次状況を見てみると、JR東日本は4月から9月までずっと前年割れしていた月次営業収入が、10月には102.1%と、今期初めて前年実績をオーバー。11月も100.4%と堅調を維持している。また、JR西日本は東日本に比べ震災の影響が少なかったが、4月から9月の上期計101.9%（運輸取扱い収入の前年比）に対して、10月は105.6%、11月は102.3%と伸長している。さらに、JR東海の新幹線利用状況は、上期計96%に対して10月は101%、11月は102%となっている。

また、経済産業省の統計によれば、「遊園地・テーマパーク」の入場者数は、震災で大きく落ち込んだが、徐々に回復し8月に103.1%と3月以降初めて前年実績を上回り、9月も101.2%と回復基調に乗っている。10月以降のデータはまだ公表されていないが、引き続き好調のようだ。

これらのデータは、震災以降自重していた外出を伴うレジャーが秋以降、活性化していることを伺わせるが、このことはホームエンタテインメントであるレンタル業界にとっては大きなマイナス要因となる。因みに「宿泊業、飲食サービス業」における7～9月の売上前年比は平均4.6%ダウン（総務省統計局）と夏商戦でも苦戦が続いているが、この数字が10月以降に回復しているようだ。レジャーが活性化していることは確実に言える。発表を待ちたい。

さて、前述した作品力の継続的な低下とレジャーの活性化を組み合わせると、レンタル不況の背景が次のように見えてくる。つまり、レンタル店の持つ商品力は数ヶ月にわたってじわじわと低下していたが、震災の影響などで家に籠もるユーザー動向＝レンタル需要の拡大により問題にならなかった。それがこの秋、ユーザーのマインドが外出志向に変化したため一気に顕在化した、ということだ。

この仮説が正しいとすると回復は容易でない。ユーザーの外出志向は今後も強くなっていくと考えられる上、長期にわたって低下してきた商品力を立て直すには相当な時間を要するからだ。まして、洋画の低調が囁かれ、『パイレーツ』や『ハリー・ポッター』のリリースですら十分な集客効果をもたらさない現在では、作品不足が続いた期間以上に長い時間が必要になるだろう。それにもかかわらず、来年の興行ラインナップを見ても取りたてて強力な作品は見当たらない。今後もレンタル店の苦戦は続きそうだ。

しかし、ランキングのところで述べた「レンタルならではのヒット作」が出てくる可能性は興行ラインナップとはあまり関係がない。そして、そうしたレンタル向きの作品が、かつての海外TVドラマや、韓国ドラマのように“ジャンル”として確立するなら、状況は一変する。現在のレンタル業界は、そうした“新たな商品”の開発を必要としているのだろう。